

新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

— 鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡3 —



平成20年3月

独立行政法人 都市再生機構千葉支社
千葉ニュータウン事業本部

財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第592集として、独立行政法人都市再生機構の新鎌ヶ谷地区整備事業関連に伴って実施した鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡3の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の疊群が検出され、これまでに刊行された調査報告に新たな成果をつけ加えることができました。刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土史の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年3月31日

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 福島義弘

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による新鎌ヶ谷地区区画整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、五本松No.3遺跡 千葉県鎌ヶ谷市初富字五本松920-1ほか（遺跡コード224-010）を収録したものである。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者と実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員森本和男が行なった。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社、鎌ヶ谷市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による1967年撮影のものを使用した。
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標系は日本測地系を用いている。
- 9 本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、挿図中に記した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経緯と経過.....	1
第2節 調査の方法.....	2
第2章 検出された遺構と遺物.....	5
第1節 旧石器時代.....	5
第2節 縄文時代.....	6
第3節 平安時代.....	9
第4節 時代不明の遺構・遺物.....	11
第3章 まとめ.....	14
報告書抄録	

挿図目次

第1図 五本松No.3遺跡の調査	第7図 SK043出土遺物
第2図 上層遺構分布図(1/500)	第8図 SK044・SK045・SK046
第3図 第8疊群(1/80)	第9図 トレンチ出土遺物
第4図 第8疊群の遺物	第10図 五本松No.3遺跡の旧石器ブロックと疊群
第5図 SK041・SK042	第11図 五本松No.3遺跡の上層遺構分布図
第6図 SK043	

表 目 次

第1表 第8疊群の石器組成表	第3表 SK043出土土師器一覧表
第2表 第8疊群の石器一覧表	第4表 五本松No.3遺跡遺構一覧表

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真(1967年)	SK046
図版2 調査前風景、上層の調査、下層確認グリット調査風景	図版4 SK041、SK042、SK043土層断面、SK043 遺物出土状態、SK043、SK044
図版3 第8疊群、第8疊群土層断面、SK045・	図版5 出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

東京から東へ約30km離れた場所に鎌ヶ谷市があり、近年、人口増加の著しい近郊住宅地域となっている。鎌ヶ谷市庁舎の近くにある新鎌ヶ谷駅周辺で、宅地造成が計画された。土地区画整理事業地内にある埋蔵文化財の取り扱いについて、都市再生機構は千葉県教育委員会と協議し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。事業地内には林跡No.2遺跡、林跡No.3遺跡、林跡No.4遺跡、五本松No.3遺跡があることが判明した（図版1）。

区画整理事業の宅地造成に伴う五本松No.3遺跡の発掘調査は平成6年度から始まり、約10年後の平成17年度に野外の発掘調査は終了した。調査対象となった総面積は35,374m²で、上層についての確認調査面積は4,666m²で、本調査面積は1,080m²であった。下層についての確認調査面積は1,953m²で、本調査面積は4,350m²であった。そのうち、平成6年度から平成14年度までの調査成果は、すでに2冊の報告書として刊行された。

1冊目に刊行された報告書は『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財報告書Ⅰ』千葉県文化財センター調査報告第457集で、平成6年度から平成11年度までに調査された分が収録された。調査対象面積は27,876m²で、旧石器時代の石器集中地点27か所（調査終了時の地点数）、土坑1基、縄文時代中期の遺物集中地点1か所、陥穴6基、土坑8基、奈良・平安時代の住居跡1軒、竪穴建物跡1基、土坑6基、中世・近世の溝（野馬塚をふくむ）3条、土坑2基が検出された。

2冊目に刊行された報告書は『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財報告書Ⅱ』千葉県文化財センター調査報告第525集で、平成13年度から平成14年度までに調査された分が収録された。調査対象面積は4,228m²で、旧石器時代の石器集中地点8か所（調査終了時の地点数）、陥穴7基、平安時代の住居跡1軒、土坑7基などが検出された。

今回の報告は、刊行された2冊の報告書に収録されなかった平成16年度と平成17年度の調査成果を、まとめたものである。両年度に行なった調査は4か所あり、調査対象面積の合計は3,270m²であった。上層についての確認調査面積は998m²で、下層についての確認調査面積は209m²であった。上層と下層の確認調査で遺構や遺物の検出がまばらであったため、いずれも確認調査で終了し、本調査面積は0m²であった。

平成16年度と平成17年度の発掘調査および整理作業にかかる各年度の調査面積、調査期間、担当職員、作業内容は、以下のとおりである。

発掘調査

平成16年度

調査面積：930m²、調査期間：平成16年6月2日～平成16年6月30日

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内茂

担当職員 上席研究員 矢本節朗

調査面積：90m²、調査期間：平成16年9月1日～平成16年9月14日

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内茂

担当職員 上席研究員 森本和男

調査面積：1,090m²、調査期間：平成17年2月1日～平成17年2月28日

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内茂

担当職員 上席研究員 森本和男

平成17年度

調査面積：1,160m²、調査期間：平成17年6月1日～平成17年6月30日

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内茂

担当職員 上席研究員 森本和男

整理作業

平成18年度

整理期間：平成18年6月1日～平成18年6月15日、7月15日～7月31日、9月1日～9月30日

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内茂

担当職員 主席研究員 宮重行、上席研究員 森本和男

第2節 調査の方法

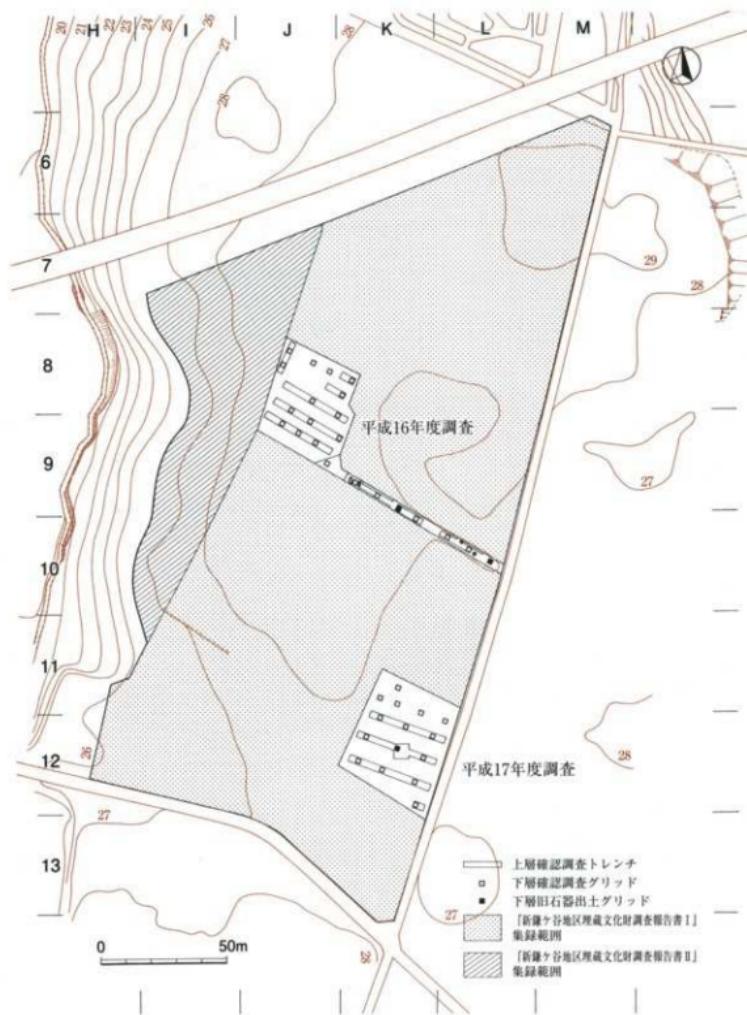
グリッドの設定隣接する林跡No.2遺跡、林跡No.3遺跡、林跡No.4遺跡を含め、遺跡の調査範囲全域に、公共座標を基準とする40m×40mの大グリッドを東西南北に設定して、調査を実施した。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて北から南に1、2、3、…とし、西から東へA、B、C、…としてこれを組み合わせて使用した。大グリッド内は4m×4mの小グリッドで100分割し、北西隅を起点に00、01、02、…として南東隅を99とした。実際の調査では、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、例えば10L45というように表記した。

上層確認調査 繩文時代以降の上層の確認調査は、調査対象範囲に、合計して対象面積の10%に相当するよう幅2mのトレンチを複数設定して行った。表土層を重機で除去した後、繩文時代以降の遺構・遺物の分布・包含の有無を確認した。

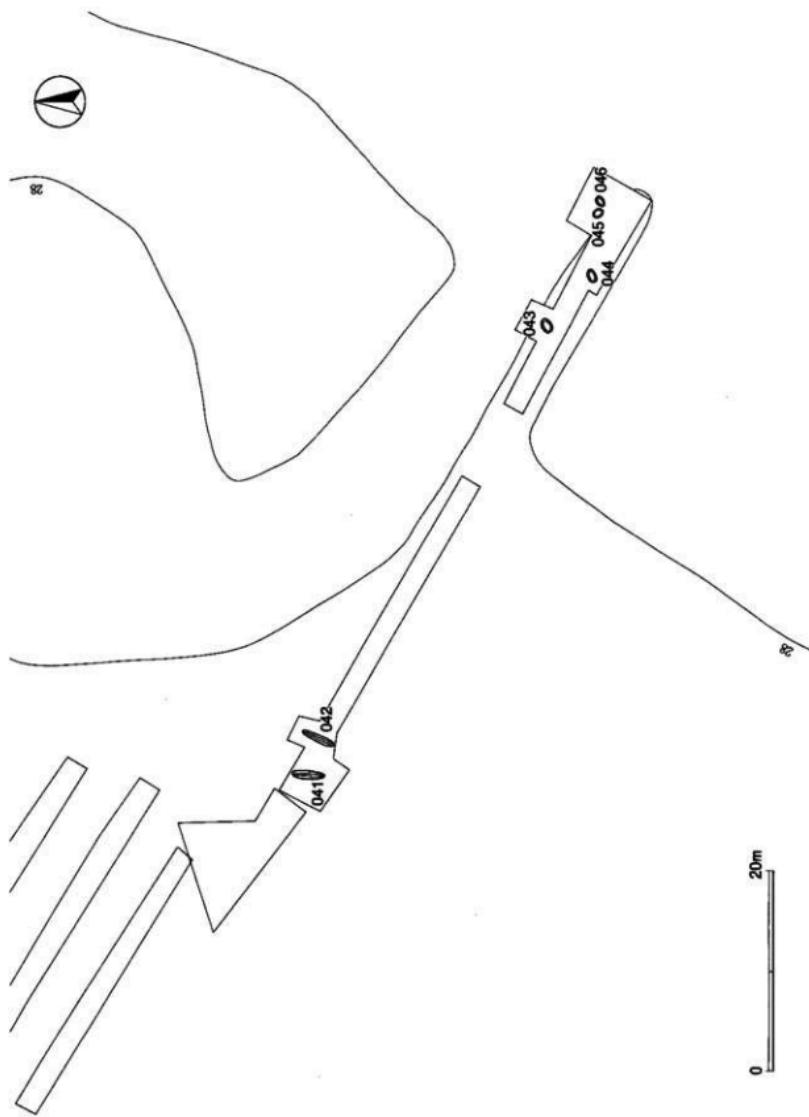
下層確認調査 旧石器時代の下層（ローム層中）の確認調査は、2m×2mの小グリッドを、合計して対象面積の4%に相当するよう調査範囲全域に複数設定した。各小グリッドを約1.8m掘り下げて旧石器の存在を確認した。もしも石器などの遺物が出土した場合には、周囲を拡張して石器が集中しているかどうかを調査した。

確認調査で遺構・遺物が多数検出され、周囲に連続すると判断された場合には、周辺の表土を除去して本調査を行なう予定であった。平成16年度と平成17年度の確認調査では、顕著に広がる遺構・遺物が検出されなかつたので、確認調査で終了し、本調査を行なわなかった。

調査成果の概要 平成16年度に3ヶ所の調査を行ない、上層確認調査で繩文時代の陥穴2基、平安時代の土坑1基、時代不明の土坑3基が検出された。平成17年度に実施した調査で、下層確認調査で旧石器時代の石器集中地点が1か所検出された。この石器集中地点の周囲を拡張して石器の広がりを確認したが、顕著な広がりがなかつたので、確認調査で終了した（第1図）。



第1図 五本松No.3遺跡の調査



第2図 上層遺構分布図 (1/500)

第2章 検出された遺構と遺物

上層の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥穴2基、平安時代の土坑1基、時代不明の土坑3基であった（第2図）。下層の調査で検出されたのは、旧石器時代の砾群1か所であった。

第1節 旧石器時代

平成14年度までの調査で、旧石器時代の石器集中地点が32ブロック、砾群が7群検出され、6つの文化層、2つの亜文化層に分類された。それらの調査成果は、これまで刊行された2冊の報告書のなかで、詳述されている。今回報告するのは、平成16年度と17年度の調査成果である。

平成16年度の調査の時、2ヶ所の下層確認調査グリッドから砾・砾片が、それぞれ1点づつ検出された。周囲を拡張して石器分布の広がりを確認調査したが、石器の広がりは検出されず、確認調査で終了した。平成17年度の調査では、焼けた砾を主体とする石器集中地点が1ヶ所検出された。確認グリッドの周囲を拡張して焼けた砾の分布を調べると、石器の分布はさほど広がらず、拡張確認調査で終了した。

平成16年度の下層確認調査グリッドから単独で出土した砾・砾片には、明白な人工的加工痕がなかったので、自然産出の砾・砾片と判断し、今回の報告から除外した。

平成17年度の調査で検出された砾群は、32点の砾片からなり、単独で小規模な砾群であった。これまで7群の砾群が報告されているので、新しく検出された砾群を第8群と命名して報告する。

第8砾群（第3図、図版3）

五本松Na3遺跡内の南東、12K25~12K36に位置する。南北約3m、東西約2mの三角形状に分布する。出土層位はおもにⅢ層上面で、垂直分布に約0.4mの高低差があった。出土した石器の総点数は31点で、そのうち焼砾・焼砾片の点数が29点で、焼砾を主体としていた。焼砾以外には、安山岩製の尖頭器1点、剥片1点が混在していた。石材は、約半数が花崗岩質で、他に安山岩、チャート、砂岩・硬砂岩のものがあった（第1表）。石材別による分布の偏在は見られず、すべて混在していた。

焼砾・焼砾片の総重量は701.22gで、平均1個24.18gであった。200gに近い大きい砾もあったが、大半は50g以下の小さいものである。すべての砾は焼けて赤化しており、加熱によって破碎したと考えられる。

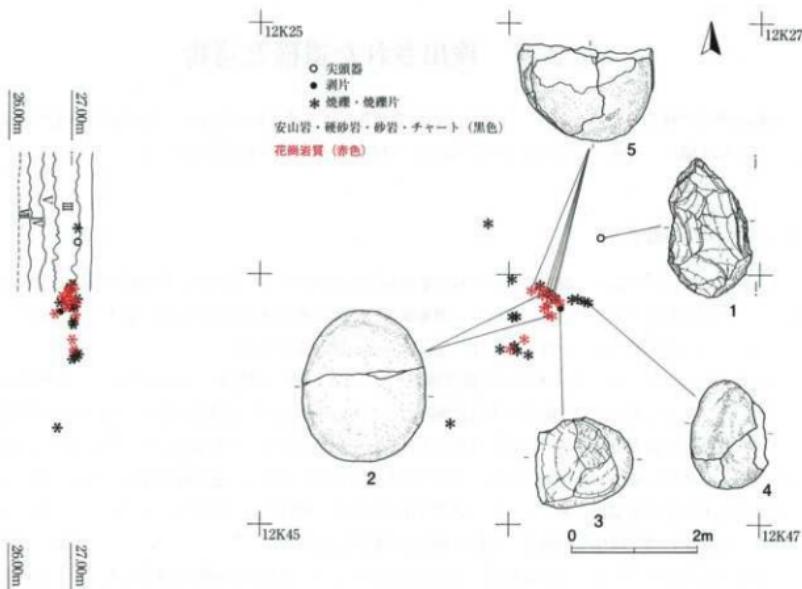
出土遺物（第4図、図版5）

焼砾・焼砾片が大半を占め、その以外には尖頭器1点、剥片1点があった。

尖頭器 1は安山岩製の尖頭器で、横断面形が薄鉢形を呈し下端部が膨らむ平面形状を呈する。綫長剥片を斜めに設定し、表面右下端部に素材の難面がわずかに残る。先端が鋭角になるように、先端から左右側縁上半部が調整加工され、裏面には平坦な面取りが施されている。

剥片 3は安山岩製の横長剥片で、打面および右側縁から下端部に難面が残っている。

焼砾 2、4、5は焼砾で、2と5が花崗岩質、4が砂岩系の石材であった。いずれも丸みをおびた砾が、熱を受けて破碎したものである。



第3図 第8縄群 (1/80)

第2節 縄文時代

平成14年度までの調査で、縄文時代の陥穴11基が検出された。平成16年度の調査で台地中央付近から、並列する縄文時代の陥穴2基が検出された。これらの陥穴は台地上に散在している。

SK041 (第5図、図版4)

遺跡の中央09K61・71に位置する。3m東側にSK042陥穴がある。長さ3.38m、幅0.54m、深さ0.74mで、細長い楕円形を呈する。長軸方位はN-24°-Eであった。底面は平坦で、壁は、垂直に近い急な落ち込みであった。遺物は出土しなかった。

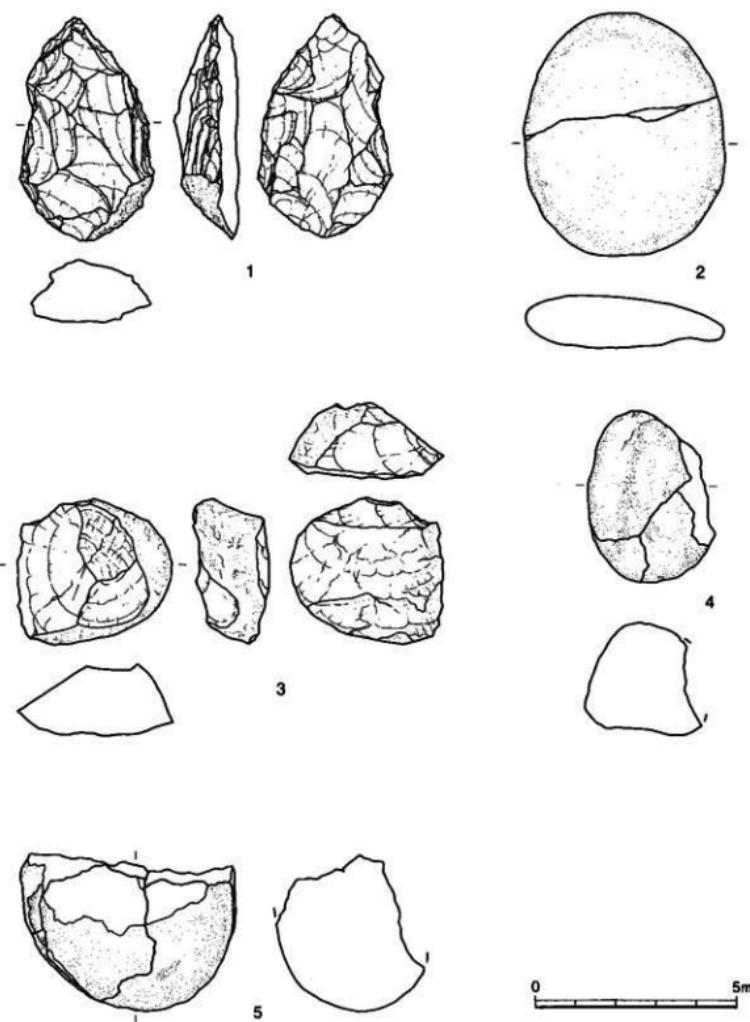
SK042 (第5図、図版4)

遺跡の中央09K72に位置する。3m西側にSK041陥穴がある。長さ3.25m、幅0.52m、深さ0.93mで、細長い楕円形を呈する。長軸方位はN-6°-Eであった。底面は平坦で、壁は、垂直に近い急な落ち込みであった。遺物は出土しなかった。

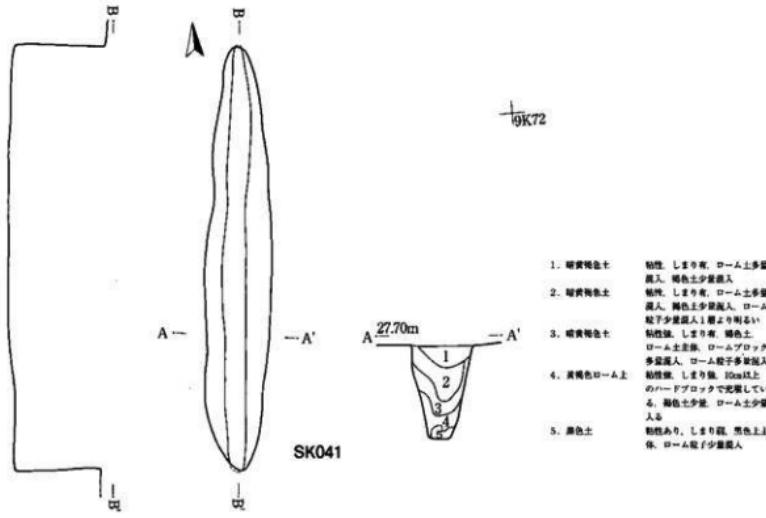
SK041陥穴とSK042陥穴は並列し、しかも規模や掘り方がほぼ同じであったことから、同じ時期に製作された可能性がうかがえる。

トレンチ出土遺物 (第9図、図版5)

上層確認調査中に、縄文土器が出土した。1と2は、おそらく同一個体と思われる。RLの縄文と沈線文が施されている。縄文時代後期の土器であろう。



第4図 第8砾群の遺物



- 暗黃褐色土 粘性、しまり有、ローム土多量
混入、褐色土少量混入
- 暗褐色土 粘性、しまり有、ローム土やや
多く混入、褐色土少量、1mほどと
い、ローム粒子少量混入
- 暗黃褐色土 粘性無、しまり無、ロームブロック
とロームの混成層、褐色土少量、
ローム土多量混入
- 暗黃褐色土 粘性無、しまり無、ロームブロック
土層、ローム上、褐色土少量混入
- 黒色土 粘性有り、しまり無、真黒な土層、
ローム粒子微量、ローム土多量混入

0 2m

第5図 SK041・SK042

第3節 平安時代

平成14年度までの調査で、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、竪穴建物1棟、土坑10基が検出された。平成16年度の調査で、遺跡中央の東側から平安時代の土坑1基が検出された。

SK043 (第6図、図版4)

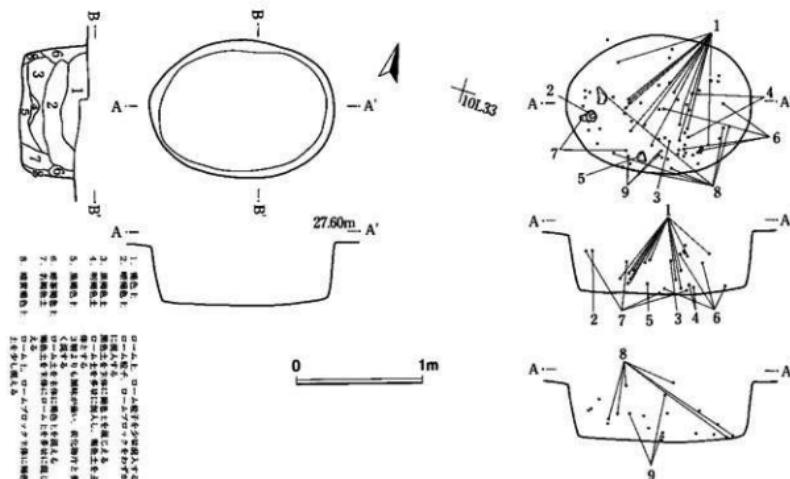
遺跡中央の東側10L32に位置する。長さ1.46m、幅1.09m、深さ0.45mで、楕円形を呈する。底面は平坦で、明確な掘り方であった。覆土中から多量の土器片が出土した。

出土遺物 (第7図、図版5)

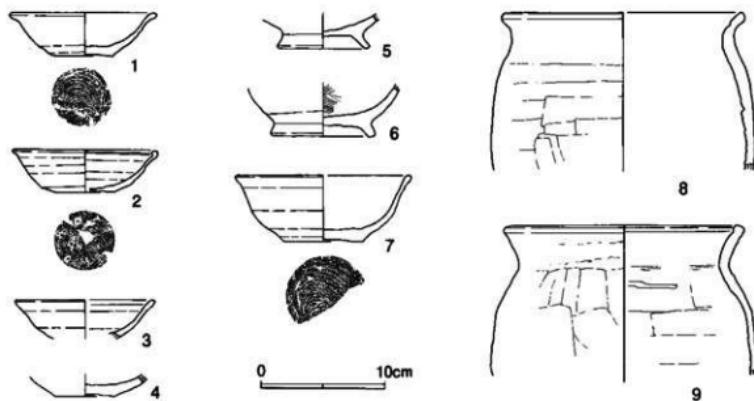
出土した土器片はすべて土師器であった。復元して図化できたものは、杯4点、高台付杯2点、碗1点、甕2点であった。1はほぼ完形の杯で、口縁部分が外側にやや外反する。口径11.4cm、底径4.5cm、器高3.5cmであった。底面には、回転糸切り痕が残っていた。2も1と同じ器形の杯で、口径11.2cm、底径4.7cm、器高3.4cmであった。底面には回転糸切り痕が残っていた。5は高台付杯の底部で、底径7.0cmであった。7は碗で口径13.8cm、底径6.4cm、器高5.3cmであった。底面には回転糸切り痕があり、その周辺にはヘラ整形痕が残っていた。

1、2、3の杯の口縁部がやや外反し、底部に回転糸切り痕があることから、土師器の年代は10世紀後半と考えられる。出土した土師器の年代から、SK043は平安時代中頃の土坑と判断される。

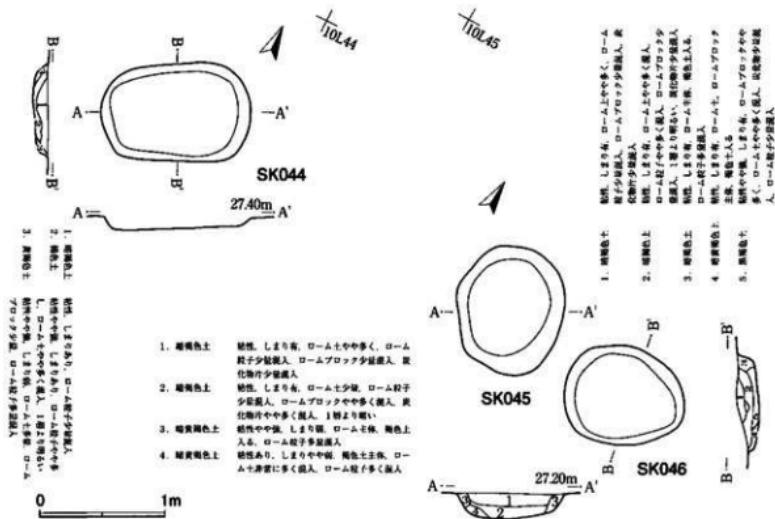
土師器の破片が多く出土したので発掘時には土坑墓と判断されたが、人骨片、骨粉、炭化物などが検出されなかった。出土した土師器が単なる廃棄された残存物なのか、特定の意図のもとで人为的に埋納されたものなのか、断定不可能である。しかしながら、土師器の破片が覆土中からかなりの高低差をもって出



第6図 SK043



第7図 SK043出土遺物



第8図 SK044・SK045・SK046

土しているため、人為的埋納の可能性は低く、おそらく廃棄された残存物と考えられる。人骨片が見つかからず、また土師器も廃棄物の可能性が高いので、この遺構は墓ではなく、単なる土坑としておく。

トレンチ出土遺物（第9図）

3は上層確認調査中に出土した土師器で、高台付杯の脚部である。底面にわずかに回転糸切り痕が残っていた。

第4節 時代不明の遺構・遺物

出土遺物をともなはず、時代を判定できなかった土坑が3基検出された。いずれもSK043土坑の周辺に位置し、浅くて小規模な土坑であった。出土遺物が共伴せず、土坑の性格は不明である。

SK044（第8図、図版4）

遺跡東側の10L43に位置する。長さ1.20m、幅0.79m、深さ0.11mで、隅丸長方形を呈する。

SK045（第8図、図版3）

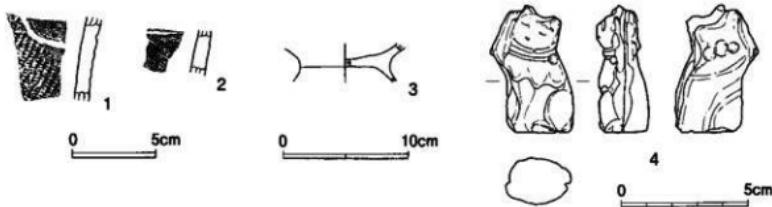
遺跡東側の10L45に位置し、SK045とSK046は隣接する。長さ1.02m、幅0.86m、深さ0.21mで、円形を呈する。

SK046（第8図、図版3）

遺跡東側の10L45に位置し、SK045とSK046は隣接する。長さ0.98m、幅0.80m、深さ0.14mで、円形を呈する。

トレンチ出土遺物（第9図、図版5）

4は上層確認調査中に出土した泥人形である。高さ5.0cm、横3.2cm、幅1.9cm、重さ17.30gであった。右手を上にあげた招き猫の形で、表面と裏面の押型からできたものを重ね合わせて作られている。^{ようさく}環珞と首輪が描かれている。おそらく江戸時代の玩具であろう。



第9図 トレンチ出土遺物

	焼砾・焼砾片	剥 片	尖頭器
安山岩	5	1	1
花崗岩質	13		
チャート	5		
硬砂岩	3		
砂岩系	1		
不明	2		
合 計	29	1	1

第1表 第8砾群の石器組成表

グリッド	遺物番号	石 材	器 種	排 図	長さ(cm)	横(cm)	幅(cm)	重量(g)	接 合
12K25	0001	硬砂岩	焼砾片	第4図1	6.85	2.30	2.90	47.93	
12K26	0001	安山岩	尖頭器		5.65	3.40	1.60	29.87	
12K35	0001	安山岩	焼砾片		1.30	1.15	0.77	0.57	
12K35	0002	安山岩	焼砾片		1.40	1.15	0.50	0.62	
12K36	0001	不明	焼砾片		3.70	2.35	1.70	17.96	
12K36	0002	花崗岩質	焼砾片		3.40	2.50	2.30	15.97	
12K36	0003	硬砂岩	焼砾片		4.60	3.45	2.40	41.35	
12K36	0004	花崗岩質	焼砾片		5.90	3.10	2.30	34.44	
12K36	0005	安山岩	焼砾片		3.67	2.33	2.39	6.87	接合①
12K36	0006a	安山岩	焼砾片		3.90	3.90	2.15	29.05	接合②
12K36	0006b	砂岩系	焼砾	第4図4	4.35	3.05	2.90	38.27	
12K36	0007	花崗岩質	焼砾片		2.15	1.95	1.53	7.88	接合③
12K36	0008	花崗岩質	焼砾		3.72	5.10	1.60	32.85	接合④
12K36	0009a	チャート	焼砾片		1.10	0.95	0.50	0.72	
12K36	0009b	チャート	焼砾片		1.15	0.90	0.53	0.71	
12K36	0010	花崗岩質	焼砾		6.00	4.70	3.33	73.61	
12K36	0011	花崗岩質	焼砾片		4.15	2.60	2.73	24.46	
12K36	0012	チャート	焼砾片		1.25	1.60	1.10	2.26	
12K36	0013	不明	焼砾		7.85	5.80	3.75	182.49	
12K36	0014	花崗岩質	焼砾片		3.88	2.72	2.02	24.24	接合⑤
12K36	0015	硬砂岩	焼砾		3.30	2.50	1.00	9.97	
12K36	0016	チャート	焼砾片		4.20	2.40	1.30	16.42	
12K36	0017	花崗岩質	焼砾片		3.32	2.70	1.88	18.58	接合⑥
12K36	0018	花崗岩質	焼砾		2.83	4.94	1.29	22.68	接合⑦
12K36	0019	花崗岩質	焼砾小片		1.70	1.65	1.13	4.01	
12K36	0020	花崗岩質	焼砾片		2.90	1.90	2.85	13.08	
12K36	0021	花崗岩質	焼砾片		3.11	2.40	1.60	15.60	接合⑧
12K36	0022	安山岩	焼砾小片		2.10	1.65	1.05	3.86	
12K36	0023	花崗岩質	焼砾片		3.25	2.38	1.42	13.46	接合⑨
12K36	0024	安山岩	剥 片	第4図3	3.95	3.60	1.90	30.32	
12K36	0025	チャート	焼砾片		1.70	1.10	0.80	1.51	
接合①				第4図2				55.53	12K36-0008, 12K36-0018
接合②				第4図5				79.56	12K36-0007, 12K36-0014,
接合③								35.92	12K36-0017, 12K36-0021, 12K36-0023 12K36-0005, 12K36-0006a

第2表 第8砾群の石器一覧表

排 図	種 類	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色 調	焼 成	胎 土	調 整	備 考
第7図1	土師器	杯	11.4	4.5	3.5	ほぼ完形	明褐色、一部暗褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで	底面に回転糸切り痕
第7図2	土師器	杯	11.2	4.7	3.4	3/4	明褐色、一部暗褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、回転ヘラ削り	底面に回転糸切り痕
第7図3	土師器	杯	10.9	—	—	1/9	明褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで	
第7図4	土師器	杯	—	—	4.7	—	1/5	明茶褐色	やや良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、回転ヘラ削り
第7図5	土師器	高台付杯	—	—	7.0	—	底部のみ	明褐色、一部暗褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで
第7図6	土師器	高台付杯	—	—	7.6	—	底部のみ	暗褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、内面磨き
第7図7	土師器	楕	13.8	6.4	5.3	1/3	明茶褐色	やや良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、ヘラ削り	底面に回転糸切り痕
第7図8	土師器	楕	18.7	—	—	—	1/5	明褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、ヘラ削り
第7図9	土師器	楕	18.0	—	—	—	明褐色	良好	細かい砂粒を含む	ロクロなで、ヘラ削り	底面に回転糸切り痕

第3表 SK043出土土師器一覧表

第3章 まとめ

これまでに刊行された調査成果とあわせて、五本松No.3遺跡で検出された遺構の概要を記述する（第10～11図、第4表）。

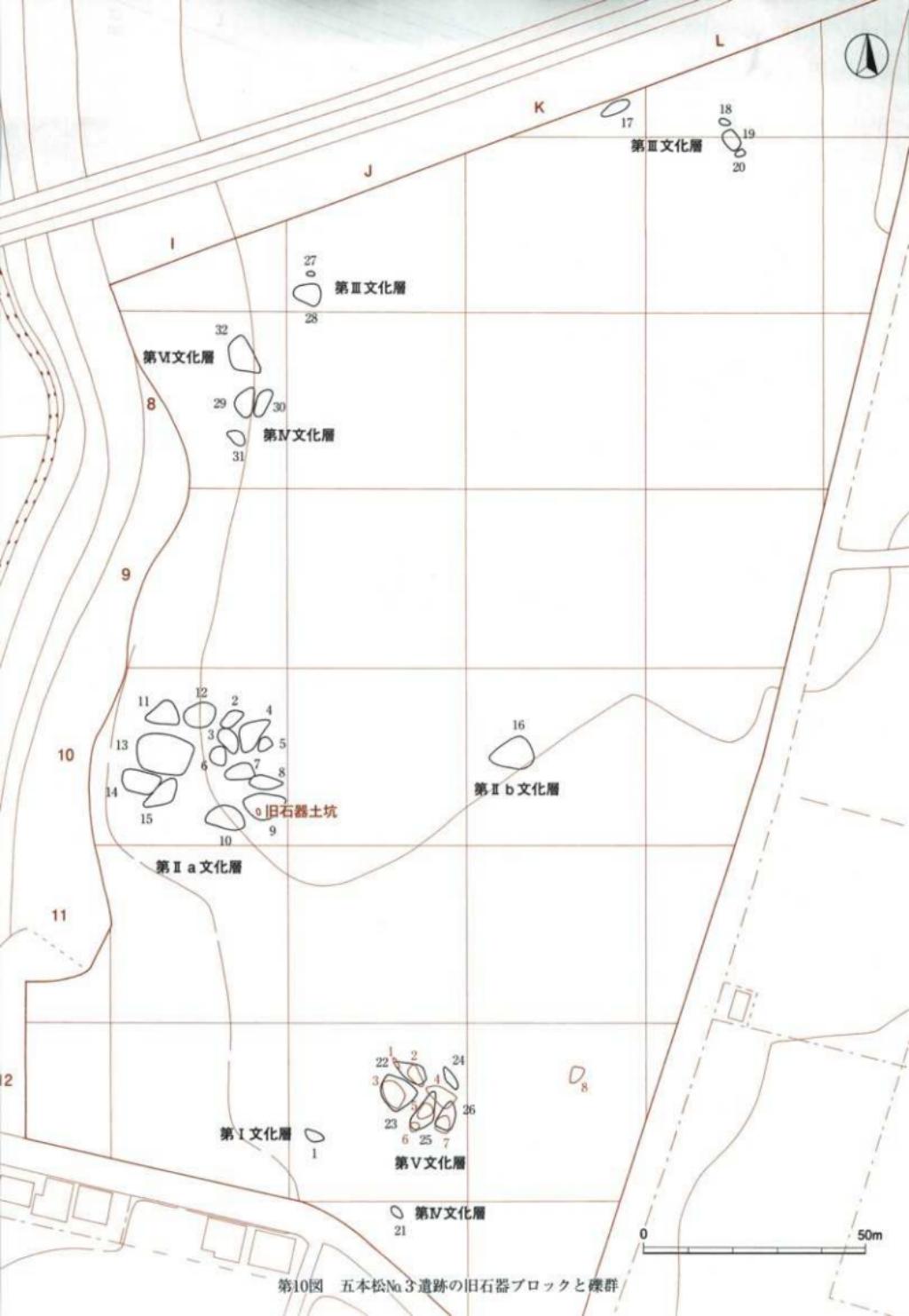
旧石器時代については、32か所のブロックと8か所の砾群が検出され、それらの石器集中地点は6つの文化層、2つの亜文化層に分類できた。第IIa文化層と第V文化層に属するブロックが、比較的大きなまとまりを見せてている。第IIa文化層のブロック群は、後期旧石器時代初期の環状ブロック群である。

平成17年度に検出された第8砾群は、出土層位がⅢ層上面であること、尖頭器が出土していること、細石刃が出土していないことから、報告書Iで提示された第V文化層に属すると考えられる。周囲には他の石器ブロック、砾群がなく、単独に存在している。

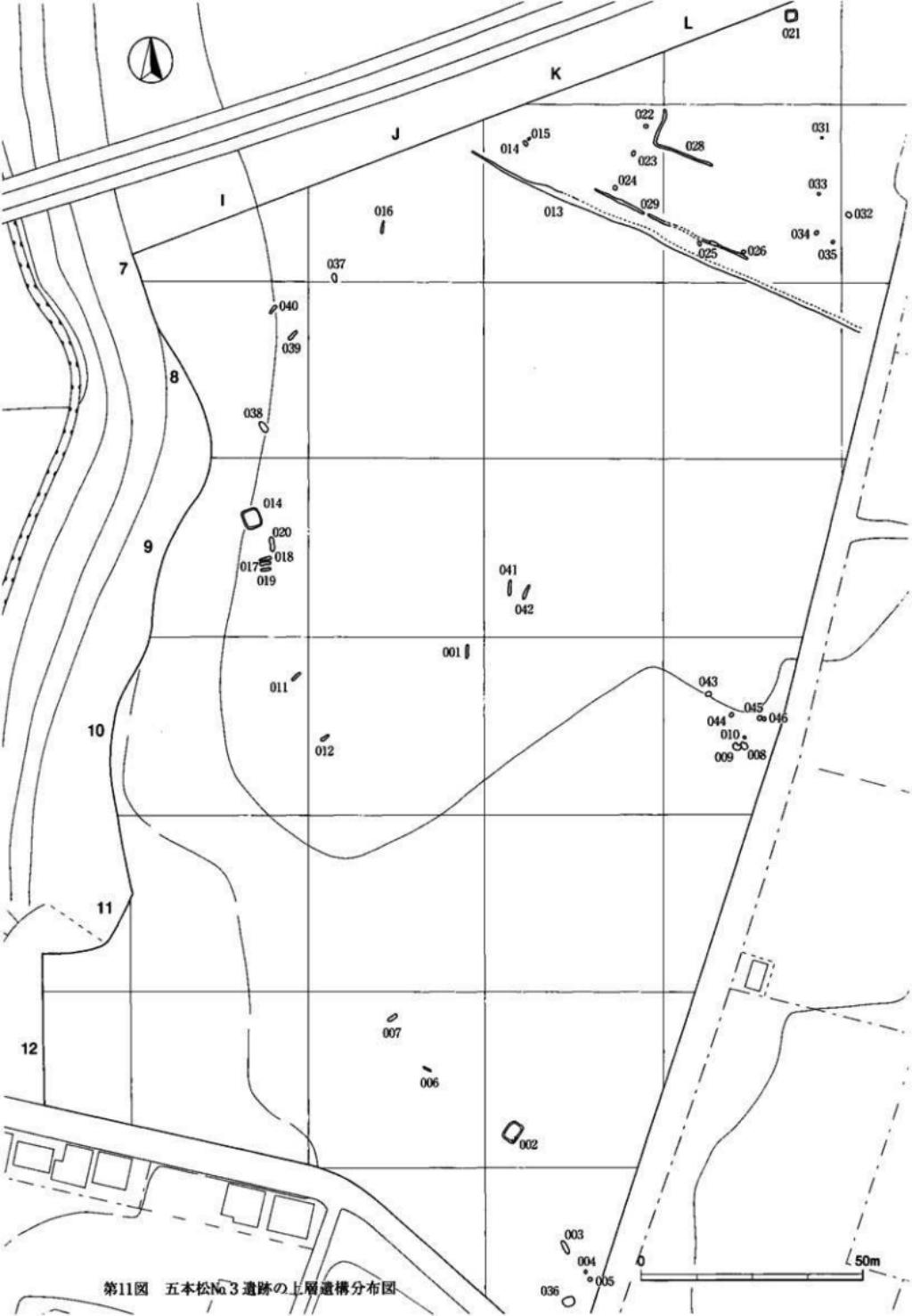
縄文時代については、陥穴13基、土坑8基が検出された。これらの遺構は集中することなく、台地上に散在していた。小支谷をはさんだ西側台地にある林跡遺跡でも同様な状態で陥穴が検出されているので、縄文時代に、周辺は漁場であったと考えられる。

歴史時代については、住居跡2軒、竪穴建物跡1棟、土坑11基が検出された。住居跡、竪穴建物跡は、それぞれ離れた地点から単独で検出され、集落を形成していなかった。竪穴建物跡の年代が8世紀後半と比定されたが、その他の住居跡、土坑の年代は10世紀頃に比定されるもののが多かった。小支谷をはさんだ西側台地上の林跡No.2・3遺跡で、ほぼ同時期の製鉄遺構が確認されているので、五本松No.3遺跡の平安時代の遺構も、林跡遺跡の製鉄遺構と関連性が考えられる。

その他、中近世については、遺跡北側で土坑4基、溝3条が検出され、時代不明の土坑が遺跡の東側から3基が検出された。



第10図 五本松No.3遺跡の旧石器ブロックと疊群



第11図 五本松No.3遺跡の上層遺構分布図

時代	文化層	遺構番号	位置	報告書
旧石器時代	第I文化層	第1ブロック	12J	I
	第IIa文化層	第2ブロック	10i	I
		第3ブロック	10i	I
		第4ブロック	10i	I
		第5ブロック	10i	I
		第6ブロック	10i	I
		第7ブロック	10i	I
		第8ブロック	10i	I
		第9ブロック	10i	I
		第10ブロック	10i	I
		第11ブロック	10i	II
		第12ブロック	10i	II
		第13ブロック	10i	II
		第14ブロック	10i	II
		第15ブロック	10i	II
	旧石器時代土坑	10i	I	
	第IIb文化層	第16ブロック	10K	I
	第III文化層	第17ブロック	6K	I
		第18ブロック	6L	I
		第19ブロック	6L・7L	I
		第20ブロック	7L	I
		第21ブロック	7J	II
		第22ブロック	7J	II
	第IV文化層	第21ブロック	13J	I
		第22ブロック	8i	II
		第30ブロック	8i	II
		第31ブロック	8i	II
	第V文化層	第227ブロック	12J	I
		第23ブロック	12J	I
		第24ブロック	12J	I
		第25ブロック	12J	I
		第26ブロック	12J	I
		第1種群	12J	I
		第2種群	12J	I
		第3種群	12J	I
		第4種群	12J	I
		第5種群	12J	I
		第6種群	12J	I
		第7種群	12J	I
		第8種群	12K	III
	第VI文化層	第32ブロック	8i	II

時代	遺構	遺構番号	位置	報告書	備考
縄文時代	船穴	SK001	10J	I	
		SK003	13K	I	
		SK006	12J	I	
		SK007	12J	I	
		SK011	10i	I	
		SK012	10J	I	
		SK016	7J	II	
		SK037	7J・8J	II	
		SK038	8i	II	
		SK039	8i	II	
		SK040	8i	II	
		SK041	9K	III	
		SK042	9K	III	
	土坑	SK014	7K	I	
		SK015	7K	I	
		SK022	7K	I	
		SK031	7L	I	
		SK032	7M	I	
		SK033	7L	I	
		SK034	7L	I	
		SK035	7L	I	
歴史時代	住居跡	SI002	12K	I	10世紀
		SI014	9i	II	10世紀後半
	竪穴遺物跡	SI021	6L	I	8世紀後半
	土坑	SK004	13K	I	
		SK005	13K	I	10世紀
		SK008	10L	I	
		SK009	10L	I	平安後期
		SK010	10L	I	
		SK026	7L	I	
		SK017	9i	II	
		SK018	9i	II	
		SK019	9i	II	
		SK020	9i	II	
		SK043	10L	III	10世紀後半
中近世	土坑	SK023	7K	I	
		SK024	7K	I	
		SK025	7L	I	
		SK036	13K	I	
	溝	SD013	7J・7K・7L・8L	I	
		SD028	7K・7L	I	
		SD029	7K・7L	I	
不明	土坑	SK044	10L	III	
		SK045	10L	III	
		SK046	10L	III	

第4表 五本松No.3遺跡遺構一覧表

写 真 図 版





調査前風景



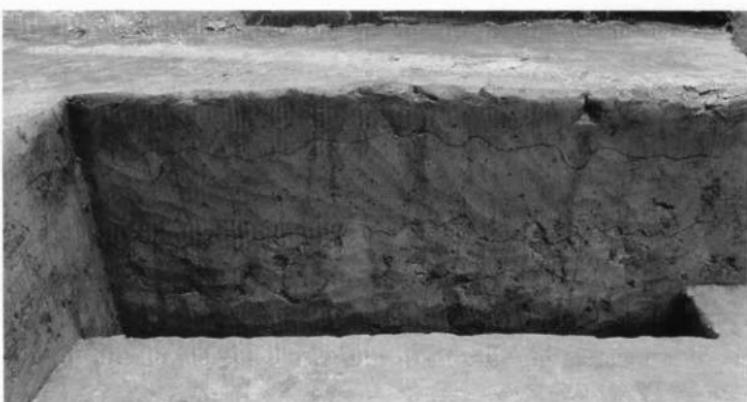
上層の調査



下層確認グリッド
調査風景



第8 種群



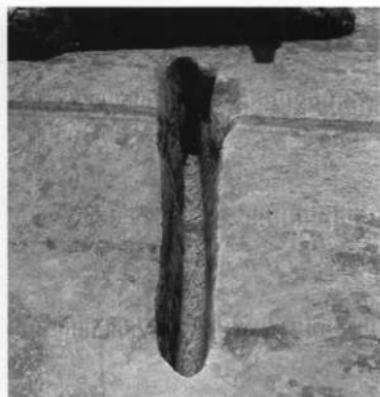
第8 種群
土層断面



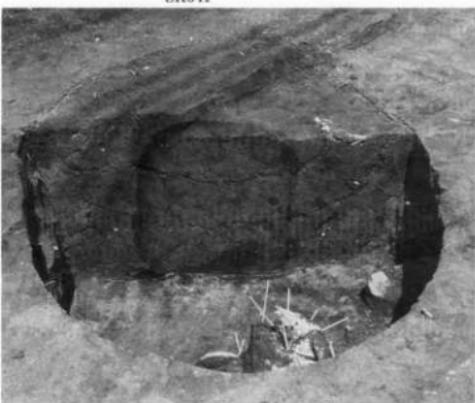
SK045 ·
SK046



SK041



SK042



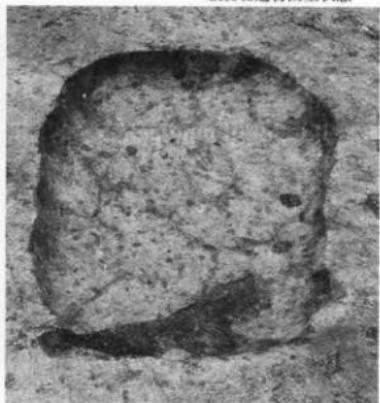
SK043土層断面



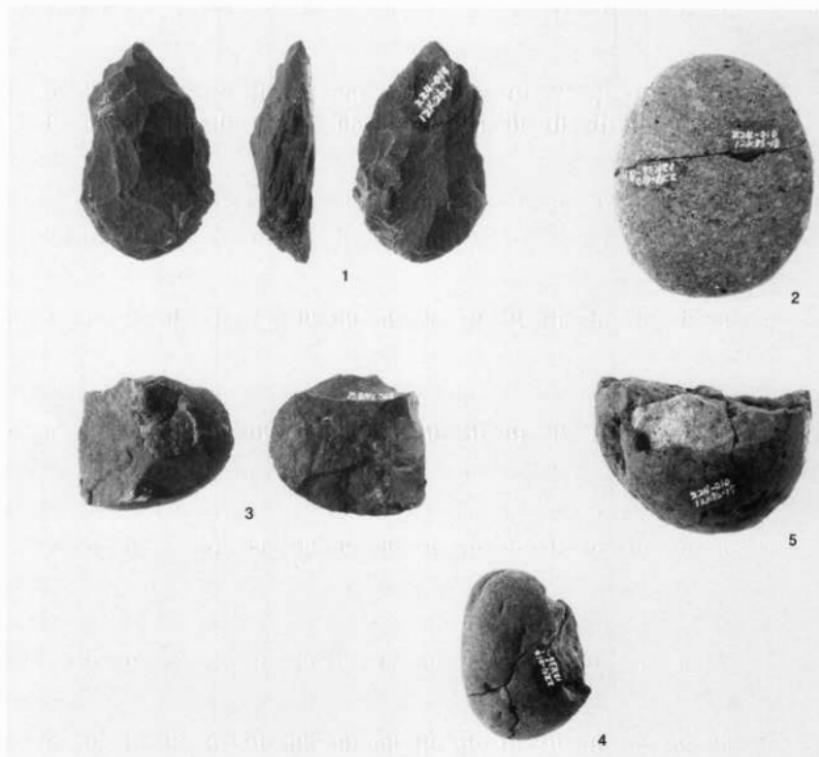
SK043遺物出土状態



SK043



SK044



第8種群の石器



縄文土器

SK043-1

SK043-2

SK043-7



SK043-5



SK043-6



泥人形 (表)



泥人形 (裏)

報告書抄録

ふりがな	しんかまがやちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ							
副書名	鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡3							
卷次	Ⅲ							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第592集							
編著者名	森本和男							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL. 043-424-4848							
発行年月日	西暦2008年3月7日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
五本松No.3	鎌ヶ谷市初富字 五本松920-1ほか	12224	010	35度 46分 47秒	140度 00分 38秒	20040602～ 20040630 20040901～ 20040914 20050201～ 20050228 20050601～ 20050630	930m ² 90m ² 1,090m ² 1,160m ²	新鎌ヶ谷地区整備事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
五本松No.3	集落跡 包蔵地	旧石器時代 縄文時代 平安時代 不明	縄群 陥穴 土坑 土坑	1基 2基 1基 3基	尖頭器 縄文土器 土師器 泥人形			

千葉県教育振興財団調査報告第592集
新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
 —鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡3—

平成20年3月7日発行

編集 財団法人 千葉県教育振興財団文化財センター

発行 独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社
 千葉ニュータウン事業本部
 印西市戸神501

財団法人 千葉県教育振興財団文化財センター
 四街道市鹿渡809番地の2

印刷 株式会社 弘文社
 市川市市川南2丁目7番地の2